

『保守主義とは何か―フランス革命から現代日本まで―』

著者 宇野重規

発行所 中公新書

定価 八〇〇円(税別)



ISBN978-4-12-102378-0

このところ「保守」が流行っているらしい。70年代、保守反動といえどヒトデナシとほぼ同義だったし、評者が保守を自覚した90年代初めでも世間の鼻つまみ者だった。それがなぜか最近誰もが保守を名乗る。ちよつと前の野党第一党の国籍不明の女性党首までが「私は保守だ」といったのには絶句した。

こうした偽装保守が続出するのは、彼らが恥知らずであるのに加えて、そもそも保守が明確に定義づけられていないからでもある。そのような時代だからこそ、

改めて保守とは何かを本書は問う。

保守はフランス革命への反作用として誕生し、一貫した理論的体系というよりは、歴史の折々で対峙する相手との関係で規定されてきた。そこで筆者は、「フランス革命と闘う」「社会主義と闘う」「大きな政府と闘う」・という章立てで保守を分析する。まずはいうまでもなく保守主義の父、エドモンド・バークが紹介され、続いてエリオット、チェスタトン、ハイエク、オークショットらが登場する。これら保守思想家に関する筆者の解説は、

類書と比べて極めて分かり易く評者も思わず何度も膝を叩いた。

しかしながら、こうした近代の保守思想家への適切かつ好意的な解説とは裏腹に、筆者は現代の保守に対してはどこか底意地の悪い奇妙な批判を展開する。筆者曰く、保守は驕っていると。今日、社会のグローバル化によって伝統や権威が自明性を失い、進歩という理念もまた色褪せた。保守すべきものを喪失し、進歩主義というライバルも没落したために、保守は変質し迷走している。それゆえ自らを正当化するために「左翼」や「リベラル」を恣意的なイメージに基づいて攻撃しているのだと。

果たしてそうなのか。保守主義の真の敵は今も昔も理性主義、すなわち理性信仰だ。正統な保守はこの点において変質も迷走もしていない。人間の理性は万能であり理性で世界を設計できるという盲信が、共産主義・全体主義の地獄をもたらした。真に理性的な人間は理性を疑う。理性の暴走に歯止めをかけるのが歴史的権威・伝統・慣習なのである。

わが国のすぐそばに大小二つの共産主義国家がある。その脅威は決して恣意的なイメージではなく、今そこにある現実だ。迷走しているのは彼らに肩入れしてきた「左翼」「リベラル」だろう。保守は敵を見失っていないし、今ほど保守が求められている時代もない。本書は保守の優れた解説書だが、こと現代日本を見る目は暗く曇っている。